中村欣一郎市長の

山椒（さんしょう）は小粒（こつぶ）でも…

Vol.39

〝ようこそにっぽん丸〟に向けて

10月17日～18日、商船三井客船が主催する大型客船「にっぽん丸」のトライアルクルーズ（試験運航）に、鳥羽港クルーズ船誘致受入協議会の会長として体験乗船してきました。横浜港大さん橋を夕方5時に出港。〝試験〟なので、どこへ向かうわけでもなく、相模湾を一周して翌朝9時に横浜港大さん橋へ戻りました。目的は商船三井客船が来月から「にっぽん丸」の運航を再開していくにあたって、旅行会社や港湾関係者を招いて、客船における新型コロナウイルス感染症への安全対策を実証し、理解をしていただくというものでした。

通常は乗客定員532人に乗組員数230人の船となっていますが、今回の試験運航では乗客100人でした。今後は最大定員の4割程度からはじめ、段階的に引き上げ、年度内には6割程度を上限に運航できるようにするそうです。体験乗船にあたっては乗船前のPCR検査をはじめ（私も検査を受けました。もちろん陰性との結果にて乗船しました）、乗船時には過去2週間の行動歴を細かく問診、乗船中は船内のどの場面においてもソーシャルディスタンスを保つための制限がありました。また飲食施設では誰がどの席を何分間利用していたかということを把握するために、乗船証と座席のQRコードをクルーのかたが読み取って記録を行っていました。また船内には診療所もあるのですが、陽性者がでたときの陽性者と一般患者それぞれの動線のシミュレーション、隔離するための船室の確保など、詳細に渡って説明を受けました。

11月16日(月)には運航再開後、初めて鳥羽港へ「にっぽん丸」がやってきます。2泊3日の国内クルーズとなっており、シャトルボートはミキモト真珠島さんの桟橋に着岸し、そこからオプショナルツアーバスに乗り換える計画です。本年1月19日のダイヤモンドプリンセスの寄港以来、鳥羽としては約10か月ぶりのクルーズ船の受け入れとなります。車や電車で鳥羽へ来られるのと何ら変わりはない、いやそれ以上に厳しい基準で対応しているクルーズ船であるにもかかわらず、ニュースで繰り返し流れたダイヤモンドプリンセスの映像もあり、クルーズ船について厳しい意見もあります。鳥羽港クルーズ船誘致受入協議会としても鳥羽市民のかたにも安心して受け入れていただくことができるように、万全の体制で慎重に受け入れを進めてまいりたいと思います。

左:首に下げた乗船証のQRコード
右:座席のQRコード

鳥羽港入港時のにっぽん丸

人権文化の花を咲かせよう

Vol.198

教育委員会生涯学習課
☎㉕1268

多様性～違いを豊かさに～

「多様性（ダイバーシティ）」という考え方は、1960年代、米国で公民権運動などの人権問題への取り組みの中で生まれ、その後、企業社会の経営指針や人材の多様性を確保する考え方などを表す言葉として用いられてきました。

最近では、新型コロナウイルス感染症の拡大と「生物多様性」との関連で、この言葉がよく使われています。また、「性の多様性」について、さまざまな場面で取り上げられています。人権教育や人権に関する啓発活動の取り組みの中では、これまでも「多様性を尊重する」ということは、「違いを豊かさに」という表現などで大切にされてきました。

多様性とは、私たち一人ひとりが、体の特徴や年齢、国籍、文化的背景、性的志向、性自認など、人権にかかわるさまざまな集団に分類されるということだけでなく、さまざまな立場をもつ多様な存在であるということを意味します。このことから、人権について考えることは、他人事ではなく、自分自身がもつさまざまな立場、視点から考えていくことが大切であると言えます。

多様性を尊重するということは、私たち自身がもっている多様性について自覚を深めながら、お互いの違いを受け止め合うということであると言い換えることもできます。「違いを認め合い、共に生きる」ということが、人権を尊重する上で大切なことです。

このことを実践につなげていくためには、その違いを背景も含めて理解し、排除せずに共に生きていこうとする姿勢とともに、そのために必要な方法やルールを作っていくことが重要になるのではないでしょうか。